



Title	夢庵新造と牡丹花宗碩両吟
Author(s)	長谷川, 千尋
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 125, 41(右)-64(右)
Issue Date	2008-06-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33913
Type	bulletin (article)
File Information	HASEGAWA.pdf



[Instructions for use](#)

夢庵新造と牡丹花宗碩両吟

長谷川 千 尋

一

永正十年（一五一三）興行の『牡丹花宗碩両吟百韻』（以下、牡丹花宗碩両吟と略称）は、宗祇没後の連歌界に重きをなした牡丹花（肖柏より改名）と宗碩の両吟とあつて、成立当初から注目を集めていたと見える。現在諸本は十九本に達し、牡丹花自らも、この作品の注釈を手がけている（宮内庁書陵部蔵、『桂宮本叢書』第十八巻に翻刻^①）他、注者未詳の古注が伝存する（厳島神社野坂家蔵、『連歌貴重文献集成』第八集に影印^②）。これらの古注釈については、上記『連歌貴重文献集成』の解説で、湯之上早苗氏が、順に第一種注、第二種注として概略を紹介されている通りで、特に付け加えるべきことはない。

ところが、改めて百韻の諸本を調査してみると、この二種類の古注の他に、なお第三の古注として佐渡大願寺蔵本^③

(以下、第三種注)の存することがわかった。第一種注は、貴重な自注だが、施注句が全部合わせてようやく二十九句、しかもそのうちの十九句が牡丹花自身の句という偏りがあつて、百韻の解説を助ける資料としてはいささか物足りなさを覚えるものであつた。ために、全句を対象とした詳注である第二種注と第三種注は、どちらも注者未詳ながら、その存在意義は大きく、分けても新出の第三種注は、これまで知られていなかった百韻の興行目的や当座の出句事情に言及するところがあつて興味深い。こうした第三種注の記述を起点として、牡丹花宗碩両吟の背景、そして、戦国の乱世に翻弄される永正期の牡丹花の境涯について考えをめぐらせてみたい。

二

永正十年二月十六日、摂津国猪名野の山里に営まれた牡丹花の草庵、夢庵で、牡丹花宗碩両吟は興行された。この年次は、京都大学附属図書館平松文庫蔵本、大阪天満宮文庫蔵長松筆本により、興行場所は、第一種注、第二種注に「於夢庵」、東京大学国文研究室蔵本に「於池田」とあるのによる。夢庵は、大阪府池田市内を見下ろす五月山の中腹に今も位置する大広寺の境内にあつたと言われ、東大本の「於池田」も夢庵の所在地を指している。

また、第三種注の端作には、「牡丹花江宗碩入御時會」ともある。京洛に住む宗碩が、兄弟子の牡丹花の草庵を訪ねることは珍しくはなかったが、第三種注は、発句の注釈の中で、特に宗碩の来意に次のように言及している。

1 逢にあひぬとふは鶯花の宿

牡丹花

問ては鶯、宿は花の宿、能似たるとなり。宿を花になすこと斟酌なれども、人をうぐひすになすゆへなり。
津国池田、牡丹花を在国させ申、新造建られ候。然者、宗碩被参候。そのあひさつなり。

「池田」は、管領細川氏の有力な被官で、池田を本拠地とした池田氏のこと。中院家の出身で早く出家した牡丹花は、文芸を好むこの一族に迎えられて当地で暮らしていたが、この度、池田氏によつて夢庵が新造され、その祝賀のために宗碩が下向してきたのだという。牡丹花の発句は、客人の宗碩を鶯に喩え、「折しも、拙宅の庭に桜が咲く頃に、あなたのような連歌の名手がお越しになつて、この上ない会席となりました」と、宗碩への挨拶の意を込める。初句字余りが、浮き立つような喜びを表現していて、新造を記念する連歌に相応しい、明るい出だしである。

発句には、このように宗碩の来訪を歓迎する意図が明白であるものの、第三種注の言う「夢庵新造」を直接示す言葉は見当たらない。例えば、宗祇の種玉庵の草庵開きの会(5)であれば、「ことの葉の種や玉さくふかみ草」と、発句に草庵の名を詠み入れて会の趣旨を明確にしているのとは異なる。だが、「ふかみ草」の発句は、客の側の畠山政長の作であるのに対し、牡丹花宗碩両吟は、発句を、亭主の牡丹花が詠んでいるため、自ら新造を言祝ぐことをしていないのは、むしろ当然なのである。

当時、牡丹花は七十一歳、宗碩は四十歳。年齢においても出自や学識の面においても、二人の立場は対等とは言えなかったため、本来は客が詠むはずの発句を、牡丹花が譲られた恰好である。結果として、残された作品の表からは、この会合の趣旨を窺い知ることができなくなつてしまつたというわけである。

そのためか、この発句に加注する第二種注や、牡丹花の句集『春夢草』の注も、敢えて百韻興行の背景には触れて

いない。「夢庵新造」は、唯一、第三種注によってのみ知られる出来事で、他の伝記資料によってもそれを裏付けることができないのである。その信憑性を疑おうと思えば疑えるが、それよりも、第三種注が、発句自体や他の注釈書からは窺い知れない会の背景を諒解していたと見て、積極的に利用した方がよいように思う。

それというのも、この注者は、百韻の興行の経緯にかなり詳しい人物のようだからである。次に第三種注の脇句の注を見てみよう。

2 をし明がたのかすむ槓の戸

宗碩

黄鳥は明がたの物なれば也。槓の戸の宿なり。時節能似合たり。この脇、五度被遊候へども、花の御意に不相候而、六度めに此句不申(被力)しと也。

この脇句のために宗碩は五度も出句したが、その度に「花」すなわち牡丹花の意向に合わず却下されてしまい、ようやく六度めにこの句が採用されたという。両者の立場関係からして、連歌の進行を担う宗匠の役割も、牡丹花が果たしていたのだろう。こうした楽屋裏が記述されるのは珍しいことである。

それにしても、なぜ牡丹花は、五度までも宗碩の句を返したのだろうか。いくら自分の方が先輩であると言っても、相手はひとかどの連歌師である。この百韻の出来映えを見ても、宗碩はよく牡丹花に伍していて、「如此取合候、面白候」(第一種注)と兄弟子を唸らせるような鮮やかな手際も折々見せている。宗碩の句が拙くて返されたと理解するとしたら、それは全く見当違いである。牡丹花にしても、せっかくの客人の出鼻を散々に挫いて、座の興を醒ますよう

なことはしないだろう。そもそも自分の発句の脇に、あれこれ注文をつけるとも思えないのだが、仮に求めるところがあったとしても、こうなる以前にさり気なく誘導して改作を促せば済むことである。

しかし、結果的には五度も句を返すことになってしまったのであるから、脇句の内容をめぐって互いにどうしても譲れないことがあったのだろう。連歌は、基本的には虚構の世界に遊ぶ文芸であるが、発句と脇句は、必ず現実の季節に合わせ、興行場所や興行の目的に関連するものを詠んだり、句のやりとりを通じて主客が挨拶を交わすこともある。「逢にあひぬとふは鶯花の宿」という挨拶の発句を詠みかけられた宗碩が、脇句を案ずるにあたってまず考えることは、牡丹花に挨拶を返すことである。例えば「お褒めの言葉に預かりましたが、私などはあなたの足下にも及びません」といった具合に自分を卑下するか、さもなければ相手にさらなる賞賛の言葉を投げかけるに違いない。宗碩は、そのような含みのある句を、手を変え品を変え出してきては何とか通そうとしたが、牡丹花は断固として受け取らなかった、という事情のように思われるのである。

現に第二種注も、この脇句を、発句の「会釈」(挨拶)に対する「卑下」という方向性で捉えようとしている(第一種注には発句・脇句とも注がなく、牡丹花は何も語っていない)。

2 をし明がたのかすむ真(マコ)の戸 碩

時分は推明がたの震心なれば、あひに合ぬと也。発句会釈に不取合、公界に打まかせて少卑下の脇也。

この句は、発句の挨拶には取り合わず、いわば挨拶など素知らぬ風で、あくまで叙景句に叙景句でもって応じた詠

みぶりであるという。だが、いかにも挨拶を放棄したように見せることで、却って挨拶性を獲得するという仕掛けが、この脇句には施されている。「あなたが仰っているのは、まさか私のこととは思われません。あくまで、お庭の花に鶯がやって来たことをお詠みになったのでしょうか」というように。第二種注の注者は、ここに作者の「卑下」の心を読み取っている。この脇句が出るまでにちよつとした押し問答があつたことを知らなければ、当時の読者の中には、宗碩が牡丹花の挨拶に正面から答えていないのを不審に思う者もいたかもしれない。第二種注の注者も、ややもすれば卑下の心の不足を感じて「少卑下」と言っているようにも受け取れる。

しかし、牡丹花としては、宗碩の卑下の句を懐紙にとどめ、それを肯定する形で作品を進めるのを良しとしなかつた。牡丹花は、「不以姓氏為高（姓氏を以て高しと為さず）」（常庵龍崇『三愛記』⁶）という人柄であつたというが、また宗碩の実力を高く評価してもいたのであろう。最終的には、宗碩が、互いの意向を損ねないように工夫して、最初の難局を乗り越えることができた。六度目にこの句が出た時には、牡丹花は思わず微笑したことであろう。

第三種注の「この脇、五度被遊候へども」云々の一節は、このような顛末を彷彿とさせるのだが、さて、この話の出所はどこであろうか。話の性質上、牡丹花が積極的に口外するような事柄とは思われないから、二人のうちでは宗碩か、その場に執筆がいたとすれば執筆が、話題の提供者になっていると考えられる。第三種注は、牡丹花と宗碩の双方に敬語を用いているが、注意して見ると、「牡丹花江宗碩入御時會」という端作から、発句、脇句の注まで、すべて宗碩を主体にした記述の仕方をしている。従つて第三種注は、宗碩自身か、あるいは宗碩門の執筆の言が容易に取り入れられるような環境で、すなわち宗碩の門流において成立したと見てよいだろう。第三種注の言う「夢庵新造」に、敢えて疑いを差し挟む余地はないと考える所以である。

ところで、夢庵「新造」は、正確に言えば「再建」となるはずである。牡丹花が初めて池田に草庵を結んだのは、彼がまだ肖柏と名乗っていた頃のことと、後年、歌集『春夢草』⁽⁷⁾に所収の池田正盛追悼の長歌(三三〇)の中で、当時のことを次のように回想している。

九重の 都のうちに 春秋を 送りむかへて とにかくに 心をのべし 身なりしを 昔に越えし 乱れ蘆の
世の波風に ただよひて 名をのみ聞きし 津の国の ゐなのわたりの 山里に 葎の門を さしこめて (下
略)

都で生まれ育った肖柏であるが、その都を巻き込んでの昔に越えた世の乱れ、すなわち応仁の乱が勃発したため、池田の山里に退避したのだという。この長歌の一節と肖柏の活動状況をもとに、木藤才蔵氏は文明十四年(一四八二)を池田移住の時期と推定し⁽⁸⁾、綿拔豊昭氏は長享元年(一四八七)を境に池田を拠点として活動すると見ている⁽⁹⁾。少し厄介だが、この問題を考える際には、池田退避、草庵建立、池田移住の三つの事象を差し当たり区別して考える必要がある。池田退避と草庵建立は同時期と考えて差し支えないように思うが、例えば、池田に退避してしばらくは寺院に寄宿するなどし、後に草庵を建てる場合も一応考えられ、また、草庵建立後しばらくは別荘として利用し、後に本格的に活動の拠点を移す場合なども考えられる。木藤氏は、前者の可能性を指摘しつつも、夢庵という庵号が、既に文明十六年の『中院内府記』に見えることから、結庵の時期については、文明十六年以前と考えてよいとしており、

この考えに従うべきかと思う。

なぜ結庵の時期に拘泥するのと言え、永正十三年（一五一六）、牡丹花執筆の『三愛記』¹⁰に、「九重の中に年をおくりしが、ちかきころほひ、つのくにるなのわたりに、いほりをむすびて夢と号し、みづから牡丹花をなとせり」という記述が見られるからである。文明十六年に夢庵を結庵していたとすると、永正十三年には既に三十年以上の歳月が経過しているのだから、「ちかきころほひ」という表現は不自然である。木藤氏もこの点を疑問視するが、「ちかきころほひ」に対して「文飾を認めなければならない」と言うに留めている。

牡丹花の『三愛記』は、先に成立していた常庵龍崇の漢文体の『三愛記』を和文で要約したものである。常庵は、花、香、酒を愛する生活を送る牡丹花に依頼されて、この三つの徳を記に綴ったのであるが、それが永正十年十月中旬（同書奥書）のことであった。引用の部分は、常庵の記に戻っても、「比年、屏居津陽、榜菴以夢、又自称牡丹花（比年、津陽に屏居し、菴に榜ぐるに夢を以てし、又自ら牡丹花と称す）」と文意は同じである。ここに「自称牡丹花」と言う肖柏から牡丹花への改名は永正八年の冬のこと、これは確かに永正十年の時点から見ても「比年（近年）」のことに属する。ならば「榜菴以夢」も、第三種注に言う夢庵新造のことを指していると考えられないだろうか。永正十年二月十六日の宗碩の訪問は、花の時節を待つて行われるということがあったとしても、新造後それほど時を隔てていないはずだから、夢庵の新造は、永正九年冬あたりから翌春にかけてのことと推定できよう。すると、これもまさしく「比年」の出来事となるのである。

常庵の記の「比年、屏居津陽、榜菴以夢」は、永正期の夢庵新造を知らずに読むと、あたかもこのとき初めて夢庵が建てられたかのように読めてしまうが、それは誤解で、意味するところが「再建」であっても漢文表現としては通

用する。もしかすると常庵も、新造後の夢庵に招かれ、牡丹花自身が「香は沈水をもととして、此国に久しく侍りし蘭奢待、紅塵、中河など名高きを賞し」「酒は唐土、南蛮の味わひを試み、九州のねりぬき、加州の菊花、天野の出群なるをもとめ」（和文『三愛記』）と綴るような、風流かつ豪奢な暮らしぶりを間近に見る機会があったのかもしれない。そのような折の座談が、『三愛記』執筆の依頼に発展したということもあり得るだろう。ともあれ、永正十年という時期に成立しているこの記もまた、元来は夢庵新造を記念する性格を持っていたと考えられるのである。

「小草庵」（漢文『三愛記』）「小隠」（『肖柏画賛』¹¹）とは、常庵が夢庵を指して言った言葉だが、これこそ、中世の隠者の侘び住まいになぞらえた文飾であつて、実際の夢庵は、周囲に贅を尽くした庭園を擁していた。

草庵のさま、四隣に長松花樹めぐれり。前庭に大きな巖あり、臥竜のごとく猛虎に似たり。海辺の石あひまじはる。其中に紅梅、軒に近きあり。蘆屋の里よりはるばるうつし来りて年をかさぬ。横斜三四丈に及びり。傍に井あり。綆のながき事数尋、桐葉おほひて暑を避くるにたよりあり。四時の花、草木にたえず、是を翫びて晨夕老をわする。よて書院を弄花軒と号す。

夢ながら心はとめし老いらくのなづさひきぬる山の岩木に（三三七）

『春夢草』のこの部分は度々引用されてよく知られているが、この夢庵の庭のありさまは、新造の前後いずれのものであろうか。『春夢草』歌集は、詠作年次の判明する所収歌が、永正十三年までのものに集中していることから、牡丹花が堺に移住する永正十五年以前に纏められたと推定されているので、新造後に完成した庭の可能性もある。ただ、

「紅梅、軒に近きあり。蘆屋の里よりはるばるうつし来りて年をかかぬ」とか「なづさひきぬる山の岩木」と歌われる庭は、相応の歳月をかけて見守られてきたもののものである。永正期に夢庵は再建されたが、恐らく、その再建は、もとあつた庭園をそのまま生かすような形で進められたのではないかと思う。

四

夢庵における牡丹花の豪奢な生活を支えたのは、池田氏、能勢氏などの摂津の国人ばかりではなく、堺の富裕な町人層や、地方から修行のために上京してくる連歌の好士たちであつたと木藤氏は指摘する。¹³⁾「津国池田、牡丹花を在国させ申、新造建られ候」とだけ記す三種注の注者が、実際の牡丹花の懷事情にまで通じていたかどうかはわからないが、しかし、この度の夢庵新造については、やはり池田氏の後援が最も大きかつたであらうことは推測に難くない。

池田氏一族の中で、牡丹花の支援者としてまず名を挙げるべきは、正盛（性繁）である。正盛は、『新撰菟玖波集』に、摂津国人衆の中で最多の四句の入集を果たした連歌数寄で、牡丹花が池田に結庵したときからの風雅の友であり庇護者であつた。もともと、この正盛が、永正期の夢庵新造の時点で存命であつたかどうかについては検証が必要である。

永正期の池田は、細川氏の内紛にまきこまれ、度々戦禍を被っている。永正五年五月、細川澄元についていた池田貞正は、高国方の攻撃を受けて池田城に籠城し、妻子だけ逃がして一族共々自害するが、このとき正盛は、いちはやく高国方に降伏し、それによって池田氏の跡目を安堵される。鶴崎裕雄氏が指摘するように、澄元と違って文芸愛好

の精神を持ち、公家や連歌師と交流のあった高国と、同じく文芸に関心の深い正盛は、氣脈の通じるところがあつたのであろう。⁽¹⁴⁾ さらに言えば、高国派の公家や連歌師と通じていた牡丹花との日頃の交誼が、正盛の情勢判断に示唆を与えるところもあつたのかもしれない。

翌永正六年二月、出家した性繁正盛入道の主催で、夢庵において『池田千句』が興行される。⁽¹⁵⁾ この千句には、戦乱の沈静化を祝し、性繁を中心とする池田氏一族の安泰を祈念する目的があつたと言われている。⁽¹⁶⁾ 翌永正七年七月には、肖柏、性繁、宗碩の三吟百韻も催された。これらの作品は、性繁一族と牡丹花の平穏なひとときを象徴しているが、性繁が一座した作品はこれ以後、残っていない。

そして『春夢草』には、先にも冒頭の部分を引用した、性繁追悼の長歌が見られる。

性繁正盛入道逝去時、寿量品を書写しておくに書きつけ侍りし

九重の 都のうちに 春秋を 送りむかへて とにかくに 心をのべし 身なりしを 昔に越えし 乱れ蘆の
世の波風に ただよひて 名をのみ聞きし 津の国の めなのわたりの 山里に 葎の門を さしこめて たよ
りとたのむ 木のもとの 深き情けに かかりつつ 花の露をも もろともに 春の日ぐらし もてあそび 月
のもとにも たちなれて 秋の宵々 いねがてに 雪の朝の 言の葉も 折につけつつ 言ひかはし 老のかた
らひ 年つもり 十とて三に なりにしを 又世の乱れ うち続き 思ひの外に へだたりて しかまに染むる
あながちに 旅の宿りに 身を隠し ありと聞きしも 悲しきに ときどきかよふ 鳥の跡 たらねし歌も 百
くさの 花の八千しほ 染めいだし 近きつてにも 見し中に 物よりことに 高砂の 尾上の花に 鐘の声

夢庵新造と牡丹花宗碩両吟

くにつみ神の 浦風に とくる氷の あやをなし 筆投げつべく おぼえにき 程もへずして 春の夜の はか
なき夢と 消えしこそ 世のことわりも 忘れられて 驚きあへぬ 涙のみ 麻の袂の ひまもなく すこし心を
しづめては おくれける身ぞ 恥づかしき 齡の程は いにしへも 稀なる年に 越えしかど かかる人やは
惜しからぬ 何のうへにも 浅からず 植ゑし草木の 花紅葉 たたへて広き 山水に 澄ます心も そこひな
く あるが中にも 敷島の 大和言葉をもととして 心の法の みなもとも いかばかりかは 深かりしこ
れを思へば むば玉の 夢の別れも 鷺の山 雲隠れけん 春の夜の月

長歌の前半部分では、故人との関係が回顧されている。牡丹花は、池田に退避して以来、性繁の庇護を受けるとともに、風雅の友として三十年に及ぶ親しい交わりを続けてきたが、再び応仁の乱以来の「世の乱れ」が起り、遂に離れ離れになってしまったという。前節で夢庵結庵の時期を問題にしたが、実は、この離別の年次さえ特定できれば、そこから三十年遡ることによつて、おおよその結庵の時期を推定することが可能である。この長歌は、専らその方面から注目されてきたが、今はここに性繁の没年についての手がかりを求めたい。木藤氏は、二人の離別を、永正九年秋から冬にかけてのことと推定しているが、性繁は、牡丹花と離別の後、「程もへずして 春の夜の はかなき夢と消えし」と歌われているので、この推定に従えば、永正十年の春、つまり、牡丹花宗碩両吟とちようど前後する時期に亡くなつていたことになる。

木藤氏の論拠は明快である。牡丹花は、性繁との離別を「又世の乱れ うち続き 思ひの外に へだたりて しまに染むる あながちに 旅の宿りに 身を隠し」と歌っているが、長歌の中には「しかまに染むる」とか「高砂の

尾上の花に」というように、騷乱の際に牡丹花が流寓した地が、播磨国であった事を思わせる地名が読み込まれている。一方、『春夢草』歌集や同句集の中には、「播磨に下りし時、しかまにて秋の暮に」とか「撰州さしがしかりし比、播州よし川といふ所にて」などの詞書が付された歌や句が見られるので、牡丹花が、撰津国の争乱を避けて、ある年の秋冬に、播磨を巡遊したことがあったのは疑いない。そこで、池田が戦火にみまわれた永正五年と永正十六年の牡丹花の動静を探ると、兩年とも播磨に下った可能性がない。ところが、永正九年十一月の『再昌草』に、「夢庵居士、播磨名所どもみたるよし申て侍し、返事に」という詞書が見られ、某年秋から冬にかけての播磨巡遊の事実と照応する。木藤氏は、この永正九年の播磨下向が、長歌に詠まれた播磨流寓の時と「同一なかどうかは問題」としながらも、長歌の「世の乱れ」は、永正八年までの撰津国近傍の騷乱を背景として見なし、二人の離別は永正九年のことであったと結論したのである。

しかし、ここにおいて木藤氏が、「しかもに染むる あながちに 旅の宿りに 身を隠し」の主語を牡丹花と見なし、していることについては如何であろうか。長歌全体の解釈をも左右する重要な問題であるので、しばらくこの点について考えてみたい。

まず、この部分を承けて続く「ありと聞きしも 悲しきに」から見ていくと、ここで「悲し」と感じているのは作者の牡丹花であるから、牡丹花が「あり(生きている)」と伝え聞いたのは、性繁の消息である。何とすることもない一節だが、牡丹花はなぜ「あり」との知らせを「悲し」と受け取ったのだろうか。木藤氏は、二人が離れ離れになったとき、性繁は、近傍の戦鬪に従事していたと考えているが、戦場の友の無事の知らせを聞いて、最初に抱く自然な感情は、やはり安堵や喜びではなからうか。「あり」を、戦場における、文字通り生きるか死ぬかといった文脈で解釈

するのは、この場合、あまり適当とは思われない。「ありと聞きしも 悲しき」と言うからには、性繁は、「あり」と聞いても牡丹花が素直に喜べないような、不本意な境遇に身を置いていたはずである。裏返せば、性繁の「あり」は、「こんな境遇でも何とかやっている」というような、「あり」と伝えてくること自体が不如意な境遇を露呈するような、そのような意味合いを持っており、だからこそ牡丹花の悲しみを誘っていると理解されるのである。

そうすると、直前の「あながちに 旅の宿りに 身を隠し」も、性繁の不如意な境遇の説明という意味合いを帯びてくる。戦況の悪化によつて池田城を退避することになつたのであるうか、あるいは、戦乱の混乱の中、生き残つた貞正の親族に命を狙われるような危険性があつたのであろうか。牡丹花ではなく性繁が、強いて他国に身を隠すべき状況に陥ることがあつたとしても不思議ではない。

さらに読み進めると、「物よりことに 高砂の 尾上の花に 鐘の声 くにつみ神の 浦風に とくる氷の あやをなし 筆投げつべく おぼえにき」という部分がある。この部分は、播磨下向の主体が牡丹花であるという前提で読むと、彼の地の名所を探訪した牡丹花が、その景観の筆舌に尽くし難いことを賛美しているように受け取れるのであるが、いくら性繁の死の直前の出来事とは言え、長歌も終盤に至つて、故人が直接関係しないと思われる私的な思ひ出に筆を割くのは不自然である。しかも、名所の景物として「とくる氷」「花」が詠まれているのは、播磨滞在が、初春、仲春を含む時期であつたことを示しているが、この点は、木藤氏の推定する永正九年の播磨下向が、秋から冬にかけてであつたことと矛盾する。

少し戻つて、「ときどきかよふ 鳥の跡 つらねし歌も 百くさの 花の八千しほ 染めいだし」の部分を見ると、性繁と牡丹花は、離別後も時々書簡を通わせ、自作の連歌を披露することもあつたらしい。連歌詠作のことは「百く

さの 花の八千しほ 染めいだし」と美辞を以て表現されているので、性繁の作品を指していると知られ、性繁の小句集のようなものが想定できる。それを牡丹花が「近きつてにも 見」たのである。「近きつてにも 見し中に 物よりにことに 高砂の」と先引の部分につながるのだが、性繁の作品の中でも、高砂の尾上の桜に鐘が鳴るさまを詠んだ句や、浦の氷が解けるさまを詠んだ句は出色で、牡丹花は添削を請われて筆を手にして読んでいたのであろうか、その筆を抛ってしまうほど優れたものであった、とこの部分は解釈できる。性繁の連歌に、ことさら播磨の名所が詠みこまれていたのは、やはり性繁自身がその地に滞在していたためであると考えられよう。

性繁は、それから「程もへずして 春の夜のはかなき夢と 消え」てしまった。仲春までは詠作ができるような状態であったが、それから間もなく、仲春から晩春のうちに亡くなってしまったのである。追悼の長歌としては、故人が、亡くなる少し前まで詠作活動をしていたことを歌うことで、その死の唐突さを印象づけ、哀惜の情を催させる構成となっている。

さて、播磨に下ったのが性繁であると考えたと、『再昌草』に見られる永正九年の牡丹花の播磨下向は、この件とは直接関わらない出来事となり、性繁の没年の推定は再び手がかりを失う。しかし、先にも触れた永正七年七月の三吟百韻の存在によって、その死が永正八年の春以後であることは確かである。また、長歌に「齡の程は いにしへも 稀なる年に 越えしかど」とあるのによれば、性繁の享年は七十歳を越えていたようだが、牡丹花をして「おくれける身ぞ 恥づかしき」と言わしめているので、牡丹花の方が年長か、そうでなくてもほぼ同年配であったと考えられる。牡丹花が古稀を迎えたのは永正九年である。このことから考えても、性繁の没年はやはり永正八、九年以後でなければならぬ。

さらに、永正七年まで交流のあった二人が離別するきっかけとなった「世の乱れ」が何を指しているかを考えるならば、永正八年の戦乱は逸することができないと思われる。永正八年七月、畿内新出の機を窺っていた四国の澄元の勢力が侵攻を始める。灘から上陸した尚春の軍は芦屋の鷹尾城を攻略し、伊丹城にまで迫る。澄元の軍は堺から上陸して和泉の深井で合戦となるが、このときの高国方の陣には池田氏の名も見える（『瓦林正頼記』）。八月、澄元方は船岡山合戦に破れて敗走するが、一連の侵攻を許した摂津国人衆が大きな打撃を蒙ったのは言うまでもない。肖柏も、永正八年七月十四日、「為京都乱刻祈祷」の百韻を独吟し、「あきに風なびかす四方の草木哉」と高国方の先勝を祈った。その願いは叶ったが、この戦乱で、源頼次、松田頼亮ら親しい友人を失った（『春夢草』歌集、詞書）。

源頼次、予之多年知音也、風雅之志至切、于茲去六月二十四日、洛中戰場而没命矣（三三三）

平頼亮豊前守、世の乱の時、致命よし伝聞きて、悲歎かぎりなし（三三七）

性繁の播磨下向が、この戦乱を契機として永正八年のうちになされたとする、その死は永正九年の春となる。京都の戦乱は前年八月に終結していたが、永正九年六月に細川高国と赤松義村の和睦が成立するまでは、摂津周辺も不穏な状況にあり、播磨で越年することになったのであろうか（但し、性繁の退避先が、澄元と同盟関係にあった赤松氏の領国、播磨であったという点は不可解である）。なお、永正八年以後、摂津国を巻きこむ大きな戦乱は、永正十六年まで見られない。既述のように、『春夢草』歌集が永正十五年以前の成立であるとすれば、「世の乱れ」が永正十六年の戦乱を指している可能性は低いと見るべきである。

結局、性繁の没年を永正九年春と推定すると、木藤氏の推定との差は僅か一年となるが、この差は、牡丹花宗碩両吟にとっては大きな分かれ目となる。すなわち、永正九年とすれば、年興行時は、性繁の没後一年が経過しており、

夢庵新造の後援者としても池田氏の別の人物を比定しなければならないことになる。この場合、相応しい人物は、『池田千句』の連衆で、性繁の後継者と目される、池田民部丞正棟をおいてはいいまいだろう。『春夢草』には、雪の日の正棟との贈答歌も見られる。

正月三日、雪ふりたりしに、梅につけて藤原正棟池田民部丞かたより申し送り侍りし

それながらをらまほしきを梅がえにやがて移ふ春のしら雪(三〇七)

返し

それながら千年のかざしたをれとや雪もかかりし宿の梅がえ(三〇七)

池田城のすぐ山手にあつた夢庵に、実際に戦禍が及んだかどうかは分からない。しかし、正棟によつて夢庵が新造されたことは、池田氏一族をも巻き込んで長く続いた戦乱がようやく終息し、この地につかの間の平和がもたらされたことを物語っているようである。牡丹花宗碩両吟の明るく平穏な空気は、そのように理解されるべきであろう。

五

永正六年の『池田千句』には、池田氏一族から三名が出座している。性繁、正棟、そして池田佐渡入道道泉である。道泉は、『春夢草』の性繁追悼の長歌の次に、その追悼歌が配列されている人物でもある。道泉の追悼歌は、名号和歌十首の構成であるが、うち四首を抄出して、詞書と共に次に掲げる。

道泉、数十年心へだてなく和歌の道に心ざし浅からざりしを、思ひがけぬ事にてなくなり侍りし、初七日に不動明王の文字を十首におきて詠み侍りし

七十の心の友におくれける老よひとひもうき夕かな (三三三)

深く思ひ重く頼みし君がため葉よりも軽く捨てし命よ (三三三)

とはぬ日もなくて馴れにし人をしも長き別とみる世なりけり (三三四)

うつしうゑし庭の槿花よりもはかなき人のかたみとやせん (三三六)

『春夢草』の配列は必ずしも時系列に即していないので、性繁と道泉のどちらが先に亡くなったのかはわからない。またこの二人の続柄も不明である。「七十の心の友」であったという道泉の享年もほぼ七十歳に達していたようであるが、その死は「思ひがけぬ事」によるものであったというから、恐らくは戦乱によって命を落としたのである。それも「深く思ひ重く頼んだ主君のために、「葉よりも軽く」命を捨てたのだという。その主君とは、細川高国であろうか、あるいは一族の長、性繁であろうか。「深く思ひ重く頼みし」という並一通りではない表現から推測する限りでは、親族の強い絆で結ばれた性繁を指しているように思われる。もし、そう考えるのが妥当であれば、性繁よりも道泉の方が先に亡くなっていることになる。また、その場合、道泉の最後の事績が、牡丹花の『古今和歌集』講釈を、薩摩の珠念と共に永正八年正月一日から聴聞した¹⁰⁾ことであるから、その後まもなく、同年秋の戦乱において戦死した可能性が考えられる。初七日を迎えての右の追悼歌に朝顔の花が詠まれていることも、その命日が秋であったことを思わせる。

牡丹花は、この道泉とも、数十年に亘って「とはぬ日もなく」慣れ親しみ、道泉の庭から貰い受けた朝顔の花を、せめてもの形見にして心を慰めようとしている。先の長歌で「植ゑし草木の花紅葉 たたへて広き 山水に 澄ます心も そこひなく」と歌われた性繁と言ひ、この道泉と言ひ、この一族は庭園に強い関心を持っていたようである。夢庵の贅を尽くした庭は、彼らの後援があつてこそ実現したものであろう。彼らは互いに頻繁に往き来し、四季折々の庭の情趣を分かち合つたのである。

ところで、『春夢草』句集の発句夏部に、次の句が見られる。

独吟に名号の連歌し侍しに

なかば人かへる世もがなほとゞぎす⁽²⁰⁾

「死出の田長」の異名を持つ時鳥は、冥界から飛んでくる鳥として和歌に詠まれる。また「不如帰」の名は、死後に時鳥と化した蜀王杜宇が、蜀が秦に滅ぼされるに及んで「不如帰（帰らんには如かじ）」と鳴いたという中国の故事をもとにしている。時鳥が冥途に飛んで行つて「帰つておいで」と鳴けば故人が帰ってくる道理があつたらよいのに、哀しいことにいくら泣いたところで帰つて来はしないのだ、といった句意である。

この句は、続群書類従に収録される、『肖柏独吟観世音名号百韻』の発句である。本百韻の諸本は五本あるが、いずれも成立年次の記載がなく、また、追善の対象が誰であるのかも記されていない。しかしながら、発句からの巻頭三句、挙句に至る巻尾の三句（すなわち最も作者の現実が反映されやすい部分である）を見れば、この百韻が誰のため

の追善であるのか、おおよそ見当がつく。

- 1 なかば人かへる世もがなほとゝぎす
- 2 もとの木立の茂り行やど
- 3 暮ぶかき月に山水声はして

98 人はむかしのさくらさくかげ

99 春毎におしみ哀み馴くなれて

100 こゝろふかくも年をふる山

巻頭には、主を失った庭園の木立が生い茂り、山水の流れる音ばかりが耳につく有り様が、巻尾には、その庭内で、かつては春が来るとに故人と親しく桜を愛でてきたこと、そのようにして風雅に深く心寄せる年月を、この山で過ごしてきたことが詠じられている。これらの表現からごく自然に連想されるのは、「植ゑし草木の 花紅葉 たたへて 広き 山水に」という性繁の庭園の有り様や、「花の露をも もろともに 春の日ぐらし もてあそび」と、牡丹花と性繁が折に触れて庭園の情趣を愛でてきたことともである。掲出の一句一句は、一般的な追善の連歌の表現の域を出るものではないが、性繁ないし道泉を念頭に置いて読むと、個々の表現が俄に一本の線につながり、現実らしさを帯びてくるのである。

そこで、この百韻の成立時期を考えると、「肖柏」の作者名が原本通りであれば、永正八年冬に改名する以前の成立ということが言える。しかし、現存本は近世末の写本ばかりで、それぞれ近い関係で流布したもののようであるし、改名後の年次を持つ百韻であっても「肖柏」と表記するものは間々あるので、現状の作者表記はあまり信用できない。一方、『春夢草』句集には永正十二年三月の奥書を持つ諸井国吉本があり、田中隆裕氏の調査²²によれば、「なかば人かへる世もがなほとゝぎす」の発句は諸井国吉本他、諸本に収められているので、この百韻が成立したのは、永正十一年以前の夏ということになる。成立時期の手がかりは今のところこれ以上には得られないが、この段階で、先に推定した性繁、道泉の没年には矛盾しないことが確認できる。

さて、夢庵新造から池田氏一族と牡丹花との関わりに及んだが、最後にもう一度、牡丹花宗碩両吟に話を戻そう。本百韻には牡丹花自讃の付句がある。百韻の中には、本歌取り・本説取りの連続技で句毎に転じていった箇所や、意表をつく発想で鮮やかに句境を展開させた箇所なども見られるが、そうしたいくつかの局面と引き比べると、牡丹花の自讃句はいたって平凡に感じられるものである。付句とともに第一種注以下の古注を一く三として挙げてみよう。

のどけきも身はいりあひの鐘のこゑ

68 ひとりなみだをおとす山ざと 同

一 山里にひとりながめて、のどかに入あひを聞おりも、身のかぎりを思へば、涙をおとすさまに候。此句ばかりや、すこし感ありとも覚候べき。

二 入あひの長閑けき夕を、人は何共おもわずぞあるらん。われは山住にて、四時うつり行を観念して、ひとり涙を

おとすと也。夢庵も御自讃候句也。

三 よはひのすへの友もなきころより沈吟すべし。

しかし、これまで述べきったことを踏まえれば、「此句ばかりや、すこし感ありとも覚候べき」と言わずにはいられなかつた牡丹花の心境がよく理解できるのである。山里の入会の鐘を聞いて涙を落とす老人は、牡丹花自身の投影である。第三種注の「よはひのすへの友もなきころより沈吟すべし」とは、老いの述懐の連歌は、若者が詠むべきではなく相応の年齢に達してから詠むべきだという当時一般の考え方に基づく言辞だが、かく言うからには、この注者も、句の内容と作者自身の現実を重ねあわせていたのである。「友もなき」という解釈は、この句の「ひとり」という言葉を捉えたもので、注者がそれを意識していたかどうかは分からないが、性繁、道泉という年来の友を失った、現実の牡丹花の孤独が思われる。牡丹花宗碩両吟は、新造を祝する明るい気分ではじまったが、ふとしたところに戦乱の傷跡が影を落としているのである。

永正十五年の冬より、牡丹花はしばらく堺に「逗留」する（『実隆公記』）が、明るる年の十一月には、四国の細川澄元の軍勢が再び摂津に上陸し、池田正棟ら摂津国人衆を敗走させ、池田城も、池田貞正の子、久宗の手に落ちた。正棟の庇護を受けていた牡丹花は、帰るところを失ってしまったのである。四季折々の庭園美を謳歌する夢庵での生活は、新造後、僅か六年で幕を閉じ、この後は新興都市堺で余生を送ることになるのである。

注

- (1) 養徳社、一九五五年。引用に際しては宮内庁書陵部蔵本の紙焼資料を用いた。
- (2) 勉誠社、一九八二年。引用は同書の影印に拠る。野坂本は、『中世文学』第四号、第六号に「於夢庵牡丹花月村両吟(前半) (後半)」(一九五四年十二月、一九五五年七月)として翻刻もされている。
- (3) 『古連歌集』上冊所収。引用は国文学研究資料館蔵のマイクロ資料に拠る。その他の牡丹花宗碩両吟の諸本は、同館蔵のマイクロ資料に拠ったものと原本に拠ったものがある。
- (4) 東京大学国文学研究室蔵本は「永正第十衣更着か」とする。他に「永正十一年二月十六日」とする三種注、「永正十二年」とのみ記す大東急記念文庫蔵本があるが、いずれも誤記と見なした。これら以外の諸本には年次の記載がない。
- (5) 文明八年四月二十三日興行。引用は京都大学附属図書館谷村文庫蔵『賦何船連歌』に拠る。
- (6) 引用は島津忠夫・藤田秀雄「松平文庫本 三愛記」(『佐賀大学文学論集』第五号、一九六四年二月)に拠る。
- (7) 引用は『新編国歌大観』により、適宜、漢字を宛てた。
- (8) 『連歌史論考』上(増補改訂版、明治書院、一九九三年)第九章第二節「肖柏の伝記」。これ以前に弥吉菅一「牡丹花肖柏——池田来栖年次の試論——」(『池田市史』各節篇、一九六〇年所収)があり、上記木藤氏の書に批判的に取り上げられている。なお、以下、木藤氏の説は特に断らない限り、すべてこの書に拠る。
- (9) 「牡丹花肖柏年譜稿」(『連歌俳諧研究』第六十六号、一九八四年一月)。
- (10) 引用は『群書類従』第二十七輯に拠る。
- (11) 引用は樋口秀雄「重要文化財牡丹花肖柏画像とその賛」(『連歌俳諧研究』七・八号、一九五四年六月)に拠る。
- (12) 木藤氏、注(8)書。
- (13) 木藤氏、注(8)書と「戦国初期における連歌師の生活——宗長・肖柏・宗碩の場合——」(『文学』第四十卷第十二号、一九七二年十月)。
- (14) 『新修池田市史』第一卷(一九九七年)第二節「戦国期の池田」六五〇頁。
- (15) 『池田千句』の興行年次については、諸本の永正十六年の記載が疑問視されていたが、余語敏男「宗碩回章と池田千句」(『中世文芸』

第四十六号、一九七〇年三月）が、永正七年奥書の『宗碩回章』にこの千句からの採録があることを指摘、永正七年以前、特に永正五年興行の可能性について論じた。その後、今泉淑男「池田千句の一本について」（『日本歴史』第五〇七号、一九九〇年八月号）が、永正六年の年次を持つ一本を紹介し、当該年次の妥当性を主張、鶴崎氏注（14）論文はこれを支持している。今泉氏の説に対して、余語氏は懸念される材料を指摘している（宗碩と地方連歌『第一編第二章の追記、一九九三年）が、稿者としては、現存本の永正六年の記載（また、その誤写と考えられる永正十六年の記載）を尊重した次第である。

(16) 鶴崎裕雄『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院、一九八八年）第四章第二節、同氏注（14）論文、今泉氏注（15）論文に指摘がある。

(17) 引用は『私家集大成』中世Ⅴ上に拠る。

(18) 引用は大阪天満宮文庫蔵『古連歌千四百』に拠る。

(19) 崎村弘文「京都大学所蔵『古今和歌集古聞』について」（『文献探究』第十号、一九八二年九月）に拠る。

(20) 『連歌貴重文献集成』第八集（勉誠社、一九八二年）に拠る。

(21) 引用は『続群書類従』第十七輯上に拠る。

(22) 『春夢草』発句集諸本をめぐって——堺の連歌師と諸本成立の試論——（『二松学舎大学人文論叢』第二十三輯、一九八二年十月）。

付記

・本稿は平成十九年度文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

・脱稿後、第三種注の一本としい『古代連歌』の写真を偶目した（『日本書房古典・近代資料目録』第八号、平成二十年五月）。佐渡大願寺蔵本は、一部、虫損により判読しづらい箇所があるため、対校可能な本文の出現は有意義である。